
サクラ大戦 オリ主 活動日記

雪野 ウサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラ大戦 オリ主 活動日記

【Nコード】

N3973R

【作者名】

雪野 ウサギ

【あらすじ】

サクラ大戦のオリ主ものです。

三十歳の中年オヤジが、十八歳になって

サクラ大戦の世界に行ってきます。

不定期更新ですがよかったら読んでみてください。

1話（前書き）

天地無用が書き終わっていないのにもかかわらず書いてしまいました
たが、

この作品は天地無用優先で書いていくため更新状況がわかりません
もしかしたらこちらのほうが早いかもしれませんが
ご勘弁ください。

では、楽しんでもらえれば嬉しく思います。
応援のほうよろしく願います。

1話

「サクラ大戦の世界にいけたら、もう私は今生活している現実世界に返ってこれなくてもいいのに」

それが、私の口癖だった。

あのサクラ大戦人気絶好調の時から今にいたるまでその気持は変わっていない。

皆も、私みたいにそんな極端なことは思わないにしても、あの頃サクラ大戦にはまった人ならきつと今も名作であると、言うことであるろう。

だからこそ今でもファンがいて、何かしら企画が立ち上がりサクラシリーズに始まり舞台にラジオ、ゲームにアニメと様々な媒体で発展していったのだろう。

ああそれにしても、どうにかしてサクラ大戦の世界に行けないだろうか？

そんな贅沢は言わないから、必要最低限の生活水準を確保できる仕事につけて定期的に帝劇のチケットが購入できるそんな立場でいいから行けないだろうか？

別にすごい力だとか、霊力が無限とか言わないから駄目だろうか？

団員になれなくてもいいんだ。本当に、その世界で生活出来ればいいよ。

それがただいま三十半ばの中年オヤジの口癖であった。

ああ本当にどうにかならないものか……。

そんな思考が日々毎日のようにエンドレスで頭の中泳ぐ毎日をおくっていた。

年を取るの嫌なものである。考え方はあまり変わらないのに年だけ取るのだから。

ああ、あの楽しいことだけを考えていた若い日が懐かしい。

今は仕事、仕事である。

やりたくもない仕事。

でもお金が無いと生活できないし、なによりほしい物が買えない。

サクラ大戦の世界にいくまえに、サクラ大戦シリーズが買えないのである。

これは本末転倒ではなからうか？

だから今日も私は働くのだ。

今、サクラ大戦シリーズはなかなか出ないが、その時のためにそなえ貯金をつくらなければならない。

欲しいグッズが手に入らないときの気持ちを味わうなんてありえな

いのである。

そんな毎日を送っていた私の住むアパートにとある手紙が封書で届いた。

日曜日の早朝のことである。

開けてみるとそこにはこう書かれていた。

帝国市民 治療直純殿

貴殿に、特殊任務として以下の部隊隊員への着任を命ずる。

帝国華撃団 降魔迎撃部隊 花組

尚、本任務は帝都守備のため機密任務である。

部隊との合流のため上野公園に向かわれたし。

帝国陸軍中将

一基

米田

これは、どついつ事だろつ。

はっきり言ってこついつ展開はサクラファンの自分にとって願ってもないお誘いである。

だが、私はそんなに馬鹿ではない。

ここは、帝都と呼ばれるのではなく日本であり、降魔など存在しない世界であり、帝国華撃団は空想の中だけで存在するものである。

リアルにあることなどありはしないのである。

手の込んだ悪ふざけにも程がある。

しかもご丁寧に、プロフィール、まあ履歴書みたいなものだろう。それを書くようにとの別途書類も含まれているなんて、手が込みすぎているのである。

お疲れ様とでも言えばいいだろうか？

帝国市民〜殿とか言って私にどうしろというのか。

まあ、このままなかつたコトにしてすべてをゴミ箱に捨てる前にこのいたずらにある意味で敬意を表して、まあ、暇つぶしは出来るだろうと思ひ詳細書類を詳しく私は読んでいった。

するとこのプロフィールを書く書類は、どうも普通の履歴書と違う項目が多くあった。

まるでテーブルトークRPGを遊ぶ時に使うステータス表記用紙のようである。

しかも細かい設定、スキルなどを与えられたポイント内で選ぶようななどのルール表が書かれた紙や、ポイントで選べる項目が記され

た図解付きのポケット版辞書みたいなのも付いていた。

結構大きな封筒で届いたと思ったたらこんなモノが入っていたのか、私はそれをパラパラと見ながら嘆息した。

いったいこれの送り主は私に何を望んでいるのだろうか？

まさかテーブルトークRPGをやれと？

自慢ではないが、私にはそんなものを遊ぶ友達などいないぞ。

ファンクラブにだって入りたくても入れないほどの小心者だぞ。

これはあれだ、私に友達がないことをあざ笑う誰かのいじめに違いない。

いや、他人と親しくもない私がいじめに合う要素など皆無ではないか？

そこ寂しいヤツとか言っつな！

ってだれに突っ込んでるんだ私は。はあ、まあいいだろう。

ひとりプレイでもして遊んでみるか。今日は日曜、暇はいくらでもあるのだから。

そうして、寂しい私は、いや違う。暇つぶしにステータスを埋めていった。

手持ちポイント 20000ポイント

身長、体重、容姿は、リアルと同じならプラス5000ポイント（これは、私が不細工だと言っているのだろうか？この送り主よくわかっていないか……）。殺す。）

まあそれはともかく、私の体型はガリで少し筋肉が付いているそんな体型である。

身長は170前後大神一郎と同じくらいであろう。

容姿はけして不細工ではないはずだ。

ああ、ぜったいにそうに決まっている。

よってここは、変更なしでポイントアップを狙ってみよう。

そこ、冒険心あるなーとか言わない！

……。言わないでください本当に。

いいんだもん。親からもらった顔に満足してるもん。

すみません。壊れてきました。まあいいでしょう。では、ただいま25000ポイント一体どう振り分けますか

ん？立場の項目でまだポイントを増やすことができそうです。

いまいる世界から他の世界の親のもとに生まれる、俗にいう生まれ変わり設定にするよりもそのままのトリップ年齢変化のみが、プラス2000にできそうです。

年齢変化をなくせばもう3000ほど増やせそうですが、ここは若返りたいです。

それに、三十歳だと体力から何からマイナス補正が中年ということについてしまうようですし、まあ、赤ん坊からでもプラス補正は付けられなくもなく、選べましたが、容姿の変換なしで今の自分とそのままを選んだ時点で、生まれ変わりの赤ん坊からという選択は消えてしまったのでそこはしょうがないでしょう。

まあ、生まれ変わりでその両親にちつとも似ていない子どもが生まれたら事件ものですし、そこは諦めるべきでしょう。

年齢変換で今の自分を赤ん坊にすればいいのですけど、親がいない状態でとても生活できるとは思えまえんし、スタートが孤児院とか、橋の下で段ボールとかそんなのは嫌です。

といたしますか、そんなんで面倒みてくれるどころか見て見ぬ振りなどされたらたまりません。

よって私は今の年齢より十年ちょっと若返ることにしました。

設定は十八にしたのです。

さあ、お待ちかね、筋力などを示すパワーなど技術的な才能を伸ばすお時間です。

とりあえず、この世界に登場するメインキャラクターのステータスを参考に決めました。

筋力、桐島カンナよりも少し高いぐらいに設定しました。

これによってガリの少し筋肉質から脂肪が殆ど見られないちょっとしたボディビルダーみたいな体型になりましたが、脂肪など食べれば付くので問題などはないでしょう。

それと、パワーよりもスピードが欲しかったので、筋肉の質をスピードタイプにしました。

重いものを持つ力と早く動ける力は同じではないということですね。

さて、肉体はこれでいいでしょう。

霊力の設定もできるようなのでやってみますか。

悩んだ結果アイリスと同じいや、ここは、見えを張って二倍とかにしてみましょう。ほんの少しチートですね。

ここまででマイナス設定によるポイント増加分はなくなってしまいました。

でもまだ二万ポイントあります。何に使いましょうか？

わたしはポイント内で選べるスキル一覧をペラペラとめくりいいものを探しました。

そこで私が選んだスキルはこんな感じですよ。

役者の才能、歌手の才能、これを最高ランクで。

医療の知識も何かがあると嫌なので、ここは才能ではなく知識と技能

を最高ランクで、気分はモグリの医者ブラック・ジャックです。

それに加え霊力を自由に操れる才能これも最高ランクで、これによって自分の霊力を物質変換できるようになりました。霊力の結晶体が作れるということです。

これで力をストックできることから様々な用途にまで発展させて使
用できるでしょう。

あとはどうでしょうか？のこり五千ポイントです。

特に思いつかなかったので無難に手先が器用になることと、頭の回
転が早くなることに残りは振り分けてしまいましたよ。

これによって香蘭以上の手先の器用さと（ブラック・ジャック並の
医術ができるため）、

アイリスがあつという間に日本語を習得してしまったしシーンがT
Vであつたように、それぐらいの頭の良さを手に入れました。

これにてステータス書き込みは終了です。

最後に所持アイテムを指定されている金額内で手持ちにできるよう
です。そして使わなかったお金は今後の活動資金として手持ちにで
きるそうです。

私はトリップで、このサクラの世界にいく設定を選びましたから、
旅人の標準装備がいるでしょう。

簡単な携帯食料、春夏秋冬にあわせられる服装何着か、サバイバル
セットということで、飯盒から各種簡単なアルミ製の食器と調理器

具、ガスコンロにランプ、ナイフに丈夫な大きな鞆など設定しました。

ちなみに使えるお金は十万円で、サクラ大戦の世界は何銭の時代なのでかなりのリッチマンでしょう。

旅する移動手段として、大型蒸気バイクを選択しました。

これは霊力でも動くように設定できたので、そのようにしました。

あとは、バイク専用の大きな鞆など付け足していきました。想像するならバイクで遠慮する物好きを想像してくればだいたい分かるでしょう。

そんな感じで設定も終わり、所持金は五万円になりました。バイクがかなりお高かったです。

武器がほしいかなとも思いましたが、霊力があるので辞めときました。

多すぎるお金は札束では持てないので、その値段に相当する金、インゴットを手持ちにして
お財布には幾らかの小銭と五百円を札束にしてもつことにしてすべての設定が終わりました。

まあ、いい暇つぶしになったのではないのでしょうか？

この奇妙な書類一式を送った主に少なからお礼を言ってもいいでしょう。

とりあえずこれぐらいにして、朝御飯を食べ映画にでも行きますか。
そうして私はお腹いっぱいご飯を食べて、着替え、町にくりだした。
今書いていた書類一式に受理しましたの判が押されているのも気づ
かずに。

1話（後書き）

よければ感想、評価お願いいたします。

2話（前書き）

早くも感想をくださった方に感謝します。

どういうふうにサクラ達を主人公に出会わせようか

かなり迷っています

なんとか方向性は決まりました。

楽しく読んでもらえたら嬉しくおもいます。

2話

さて？ここはどこだろう。

私は、何故かサクラ舞う公園にいた。

たしかに私はアパートの扉を開けて自分の住む二階から階段をつか
つておりたはず。

そこまでは良かったのだ。

だが、階段から降りた瞬間私が視線をあげると今言ったような光景
が目の前にあったのだ。

しかも、背中が異様に重いと思ったら大きな鞆を背負っていた。

覚えもないのに背負っているし、着た覚えのない服装と身なりを私
はしていたのである。

ダッフルコートをきた旅人というところだろうか？（見た目はお洒
落っ気のない軍人用コートである）

春の季節らしく少し肌寒いこともありあまり違和感はないが、少し
暑いかもしれない。これは早く脱いだほうがいいようだ。

とりあえず私は重い大きなかばんを背中から降ろして大きなコートを
脱いだ。

するとどうだろう。

私は自分の体つきが異様なほど筋肉質なのに気づいた。

まるで暇つぶしに設定した肉体データのようだ。

腕が丸太みたいに太い、きつと腹筋も綺麗に割れていることだろう。

一体どういう事なんだ？思考がブラックアウトしてしまいたくなるこの状況に私は焦りを覚えた。

そんな混乱した思考を目覚めさせるように私の袖を引く小さな手が複数あった。

いったいなんだ？そう思うとどうやら十歳未満のちびっ子のようであった。

「兄ちゃんこの大きな乗り物なんて言うんだい？」

ちびっこたちが好奇心の目で見つめ指を指している先には僕が旅には必要だろということを選んで大型蒸気バイク（霊力可動も可）があった。

こんなのを目の前に突きつけられてはこの場所がどこか否が応でもわかってしまう。

この場所は上野公園だ。

しかもここは来たくてたまらなかったサクラ大戦の世界だ。

そくに違いない。だってこんな手のこんだこと一般人の私にするわ

けない。

それに落ち着いて周りを見渡してみれば着物をきている住民たちの多いこと多いこと。

私は思わず大声で笑い。

近づき集まっている子供たちとあるひとりの頭に手を置くと、あれはバイクって言うんだ。速いんだぜーと教えてやった。

すると幾人かが反応してそれに乗せて欲しいと言ってきたので、親の許可もらってきたらいいよ、と答えてやるとみな喜んで親のもとへかけ出していき、許可をもらったのだらう。

親を引き連れてさっきの子供たちが戻ってきた。

「俺先ー」

「私先ー」

と言い合いを始めたので、じゃんけんをさせ順番を決めさせると、私は子どもを乗せて上野公園を何周かして子供たちと遊んだ。

そして日も陰ってきた頃そろそろ帰る時間だからと親達子供たち促した。

これで私も開放か、と少しさみしくなっているところに、遊んであげた子供の親御さんの一人が私にお礼として最近はやりの団子屋さんの団子らしい串団子十本入をさしだした。

くれるらしい。私は遠慮なくもらうことにした。おなががすいたのである。

そこで思いに至る私は今日泊まるところがない事に気がついた。

物のついでと私は目の前の団子をくれたご主人に旅人だと告げどこか泊まれる宿屋がないか聞いた。

すると何たる偶然か、このご主人旅館を営んでること

そんなこんなで私はその親御さんの心意気で格安で長期間滞在の許可をもらい。お世話になることにした。

お金は十分あるが安いにこしたことはない。

さて細かいことは明日にしていまは腹いっぱいご飯を食べて寝るとしよう。

それからでも遅くはないはずだ。

ということで私はサクラ大戦の世界で一体何をするのか考えながら大型バイクを手で押して泊めてくれるという親御さんの後ろについていった。

旅館につくとご主人の女将さんを紹介してもらい、女中さんにしばらくお世話になるだろう部屋に案内された。

ふむふむ。

かなりいい部屋ではなからうか？これで、朝と晩の飯がついて一日

二十銭は安いのではないだろうか？

別途料金で頼めば弁当も付けてくれるらしい。ちなみに弁当代は一食六銭（六百元）である。

私がいた世界の貨幣価値に換算して一泊二日、約二千元ということになる。

カプセルホテルより安いと思う。それだけこの宿のご主人が安くしてくれたということなのだろう。

普通なら、一泊二日五十銭以上はしてもいいくらいなのだから。

ちなみに日雇いの人の給料、この時代の人の平均が一円と五十銭ぐらいたというのを覚えておくところ世界の貨幣価値がいくらか知らない人でもわかるとおもう。

もっと言うなら

一銭が、百円。

一円が一万円。

百円が百万円。

である。

私の手持ち資金がだいたい5万円だから軽く五億円ある計算になりますね。もはや二ートが出来るリッチマンです。

それを考えるとこの宿のご主人に泊まる料金を安くしてもらわなく

ても良かったのですが、まあ、この先何がわからないので、主人の心意気に感謝するとしましよう。

ということで私は温泉に入って今をどうするか考えたいと思います。私の肉体がどう変化し、ちゃんと若返ったのか確認しなければならぬのです。

では、行ってきます。

ものすごいですね。

若返りというものは。

今更衣室についている鏡で自分の体を見ているのですが、ムツキムキです。

見る人が見たらヨダレが止まらないでしょう。

しかも十八ぐらいにちゃんと若返っています。これは言はずにはいられません。

思わず腰にぶら下げている息子を勢い良く回して扇風機―としてしまいたくなるほどです。

というかしています。喜びに体は正直なんです。

「扇風機―――――」

ガラガラガラ（露天風呂の扉が開けられる音）

「ha!」

突然のことに私は驚き先程まで勢い良く動かしていた腰を硬直させ動きを止めました。

自分の息子はそのせいか元気がなくなり回らなくなり、しだいに下に垂れ下がりノーマルモードへ。

恥ずかしすぎます。

きっと私の顔は真っ赤でしょう。

でもここで私は救いの道を見つけました。この風呂に入ってきたのは七十代ぐらいのおじいさんであったからです。

きっと、長い人生経験から私のことをスルーしてくれるでしょう。

そくに決まっています。

するとどうでしょう。おじいさんが僕のおしりを勢い良く叩き、「腰がかいっとらん!」といきなり怒りだしたのです。

一体どうしたというのでしょうか。

はあ、おじいさんのマシンガントークによれば、今日が結婚初夜だと勘違いされたようです。

テンションマックスで私に子作りの何たるかを叩き込もうとします。

「こつえぐるようにだな」

とか言われても困ります。

アドバイスはたしかに嬉しいですし、実際新婚初夜なら付き合ってもやぶさかじゃないかもしれません。

といいますが、もしそうならこの三十年彼女なしの童貞やるうの私は、きつとこの爺さん以上のテンションで、ひと目もはばかることなく腰振り運動を練習したことでしょう。

そんなこんなでなんとかやり過ごし僕は露天風呂から上がり自分の部屋に帰ってきました。

ここに帰ってくるまで、あの爺さんに始まり他の旦那さん達につきまわり腰振りの何たるかを教え込まれたというのはいい思い出なのでしょうか？

ですが、みなさんのアドバイスも当分必要ないでしょう。だって使う相手がいないのですから。

きつと、私にウツになれとそういうことなのでしょうね？

まあ、いいとしましょう。

忘れるに限りません。その時のことなんて思い出したくありません。十人のむさくるしい男が風呂場で腰振りの伝授をしている姿なんて誰も描写してほしくないでしょうし、この先のことを考えましょう。

そうして僕は女中さんに引いてもらった布団の中に入り思考しながら眠りにつきました。

一方、治療直純が上野公園で子供たちと遊んでいた頃、一人の海軍少尉がある一人の女の子に帝国華撃団への案内を受けていた。

大神一郎その人である。

2話（後書き）

やっと原作の登場人物が次回に出せると思います。

大神視点と、主人公視点など使い分けて書いていこうともいます。

またよければ感想、評価よろしくお願いします。

3話 帝都・花の歌劇団 大神一郎編（前書き）

もっと長く書いてからアップしようと思いましたが
きりがいいので今日はここまでとしてあげときます。
次回は明日か三日後ぐらいだと思います。

3話 帝都・花の歌劇団 大神一郎編

花小路頼恒はなこうじよりつねは、いま自身の執務室に呼び寄せた大神一郎という若い海軍少尉に特殊任務配属を言い渡していた。

「……大神一郎くん。本日付けで、君は帝国歌劇団・花組に転属になる」

そのの辞令を聞くやいなや、使命感に満ちた若き少尉は背筋を伸ばし、なんとも見事な敬礼によって答えた。

「は！大神一郎、粉骨碎身の覚悟で頑張ります」

そんなハキハキとした気持ちの良い声に花小路頼恒は、満足そうに頷いた。

「うむ、良い返事だ。私のような政治屋が歌劇団のような軍事機密をここで話すわけにはいかん。

詳しいことは帝国華撃団の総司令長官にお聞きするといひ。では、上野公園に向かいたまえ。

君を隊長に推薦したわしの期待に答えくれ。」

大神は、期待されることに喜びそして使命を果たす義務感に心を緊張させながらもこの任務を拝命した。

自分がなさなければならぬ特別な仕事だと意識して。

「了解しました！大神一郎、これより上野公園に向かいます。」

「帝都の未来は君にかかっている。頑張ってくれたまえ」

「は！」

そうして場所は上野公園、今日はいい天気であり桜がとても見頃である。大神は桜に意識を奪われながらも合流地点である目的地へと足を進ませた。

それにしても花見客でここはごった返しているな。こんなに人が多くては誰が迎えに来るかわからない。

まあ、俺は軍服を着ているし分かりやすいと思うけど、まあ、なるようになるか。

ああ、そういえばこの前、怪物騒ぎがあったのはこの上野公園だったっけ。

なんでも、その怪物を一刀で切り伏せたとか……。

そんな思考を巡らしながら大神は待ち合わせ場所にあられるだろう人をまった。

それにしても、いつくるのだろう。

ん？あの女の子こっちを見ているな。あの子か？

どうやらそのようだ。俺のそばへ駆け寄ってくる。

「あー。大神一郎少尉ですか？」

「は、はい。自分は大神ですが」

大神はまさかこんな若い女の子が来るとはおもわなかった。

桜色の着物を着て花も恥じらうお年頃とでもいうのだろうか？

近くに寄られるとなおいつそう若さが際立って意識してしまう。

年は十六、十七ぐらいの娘さんに見える。

自分も確かに若いがこの子も特殊任務を請け負っているのだろうか？

と、まあこんな考え込んでも仕方がない。相手を知れば百戦危うからずとも言うのではないか。

戦いはしないのだが、相手の名前をまずは教えてもらおうとしよう。

「あの、失礼ですがあなたのお名前は？」

「私、真宮寺さくらです。大神一郎少尉をお連れするようにとの任務を、米田中将よりうけてまいりました。」

日露戦争で活躍した英雄、米田中将がこの子に俺を迎えに来るように行ったのか。

米田中将の何かしらの秘書的な仕事をしている子なのだろうか？

だが、俺が任務を受けたのは秘密任務。こんな若い子がそんな今から隊員になるものを把握する重要なポストにいるとは思えない。

なによりこの子からは軍人特有の雰囲気を感じられない。ここはもう百聞は一見にしかずだろう。

わからないことは聞くとしよう。

「あなたは、あの………帝国華撃団の方ですか？」

「はい。帝国華撃団・花組真宮寺さくらです。よろしくお願いします。」

「は、ははまさか、あなたのような若い女性が隊員とは正直驚きました。」

いや、ほんとうに驚いた。

司書か何かではまさかないだろとは思ってはいたが、まさか隊員だとは、いいとこ事務か何かやっている子だろうと失礼ながら思ってしまっていた。

「頼りになりませんか？」

真宮寺さくらくんといったか、驚かれるのは予想済みですと言つように彼女は微笑んで俺に問いかけた。

「あ、い、いえそうではないんですが」

俺は慌てて彼女に取り繕った。いくら年下の可愛いお嬢さんといった女の子でも、たとえ世間知らずに見えたとしても失礼なことをしてしまっていた。

考えて見れば秘密部隊だけにこんな女性隊員がいてもおかしくはないかもしれない。ここはもうむりやり納得するとしよう。

そんな俺の葛藤をよそに、彼女は俺を何処かへと案内しようというのか、ここから見える都心をさして言った。

「さあ、大帝国劇場にまえりましょう。」

「え！劇場ですか？」

俺はまたもやびっくりしてしまった。ここへは遊びに来たのではないからだ。

秘密基地に行くんじゃないんですか？真宮寺さくらくん！と大声で言いたくなる自分を抑え、俺は冷静に指摘してあげることにした。それが親切というものだろう。まずは観光はいいと断って、俺は彼女に姿勢を正して言った。

「自分は任務中です。残念ながら芝居を見物している暇はありません。」

そんな真剣な態度の大神に、さくらは吹き出しそうになった。

まあ、知らないとはこう言うことを言うんですね？とひとりごち、さくらは落ち着いて大神にこうかえした。

「違います。大帝国劇場に帝国華撃団の本部があるんです。」

その一言に自分が盛大に勘違いしていることに気がついた。もはやお手上げ、降参というぐらいに。

「敵の目を欺くにはまず味方からということですか。」

もはや大神はから笑いしかできなかった。

「兵法の極意ですね。では、まえりましょう。」

大神は着任早々自分がつく部署に不安を覚え意気消沈した。ここはもう黙ってさくらくんに付いて行こう。

大神と真宮寺さくらは蒸気式のチンチン電車にのり、二人は劇場にむかった。

3話 帝都・花の歌劇団 大神一郎偏（後書き）

いつも読んでくださる方々有難うございます。

初めての方も楽しんで読んでくださっていただければいいのですが
よければ感想、評価よろしく御願します。

そろそろ天地無用の方もアップしようと思っておりますので
ぜひそちらの方も読んでくだされば嬉しく思います。

4話 大神一郎偏 続き(前書き)

いつも読んで下さり有難うございます。

今回はアイリスが出てきます。

大神編はしばらく続きます。

主人公偏は最初の降魔との戦闘の際に入っていくと思います。

なにぶんまだ書いていないのはつきりとしたことが言えませんが
頑張って書いていこうと思いますので応援宜しくお願いします。

4話 大神一郎偏 続き

大神一郎は真宮寺さくらとともに劇場にたどり着いた。

大神の目につつる目の前の建物は、なんとも真新しく、去年できた大帝国劇場であることがうかがい知れた。

できた当時新聞に載っていたので大神はよく覚えていた。

実物がこんなに大きいとは思わなかった。

銀座の一等地、しかも銀座のまん真ん中に建っているとは……

大神は帝劇を見上げその大きさに感心した。

確かにこんな堂々と建っていればまさかここが秘密部隊本部だとは誰も思わないだろう。

そんな感心している大神にさくらは大神が初めて此処に来たことに気づいた。

だったらここは職員などが使う裏口ではなく、正面玄関から入ってもらったほうがいいかもと考え、さくらは大神を正面ロビー入口に立たせた。

そして勢い良く大きな扉を開けて大神を招き入れた。

「さあ、お入りください大神さん」

「ああ、さくらくん」

大神はさくらに導かれるままロビー入り口に足を踏み入れた。

するとどうだろう。この帝劇の玄関の立派なこと。調度品など置かれ、もし泥棒が見たら真っ先に持って行きたくなるだろう物ばかり置かれていた。

それなのにもかかわらず、ここには警備員の一人もいないのである。すこし無用心ではなからうか？

ここは、何気なく人がちゃんと管理しているか聞いたほうがいいだろうか？大神はそう思いさくらに問いかけた。

「さくらくん。ここはやけに静かなんですね。人がいなくていいんですか？」

「ああ、今日は夜の部だけなのでこんな感じでだれもいないんです。」

夜の部？大神はさくらのこたえに疑問が湧いた。夜の部だと人が警備しなくてもいいこととはなんだろう？

夜間訓練でも行うから今は寝て体力を温存したほうがいいのかということなのだろうか？

いやまさかそんなことは……………。

大神は根が真面目であるため秘密任務の方にはかり意識が行きがちのようだ。

思考がここの警備についての論議で大神の頭の中を支配しだした。

そんな大神の様子に気づくわけもなくさくらは大神に声をかけた。

「間もなく会場しますから、すぐにここはお客さんで溢れかえるんですよ」

その言葉はさくらにとって親切で説明しているぶるいに入るものであったのだろうが、大神にとってそれは痛恨の一撃だった。

そうか、ここは劇場だもんな、そうだよな、ここは劇場なんだ。

大神は一人心のなかでのの字を書いた。

そんな落ち込みまくった大神の心を晴らすかのように、高く、親しみ深く、かわいらしい声が大神の耳に届いた。

「ねえ、お兄ちゃんはだれ？ さくらの恋人？」

「ぶふーーーーー」

大神は先程までの落ち込むという感情をこの口から盛大に吐き出してしまった。

息と唾と一緒にである。

な、なんなんだこの子は！？

そんな驚く大神は何も言えずに固まった。

それをフォローするかのようにさくらはしょうがないというようにして突然出てきた小さな女の子をやさしく叱責した。

「アイリス。大人をからかってはいけません！こちらは帝国華撃団に配属された大神一郎少尉よ。」

大神はなんとかさくらのフォローで立ち直り、目の前のアイリスと呼ばれた女の子に自己紹介した。

「あ、か、海軍少尉大神一郎です。」

大神はカミカミだったが自己紹介をなんとか終えた。きつとさくらのフォローしきれなかった部分がそこで出てしまったのだろう。

あるいみ自業自得ともいえるが、そんな慌てふためく海軍少尉にアイリスはクスクス笑って、私もと自己紹介をした。

「帝国華撃団・花組アイリス・シャトーブリアンです。アイリスってよんでね。で、こっちはくまのジャンポール。アイリスのお友達なの仲良くしてね」

は、は、は、こんな子供が秘密部隊の隊員なのか。大神はさくらにあっけから感じた不安が次々に的中していくのに真鍮穩やかではなかった。

帝国華撃団って一体なんなんだ？

そう思はずにはいられない大神だった。

そんな大神の思考はパニック寸前であった。

頭の中がグラグラ揺れて不安定である。

心のなかにある何かの吹き出してきそうな感覚が大神を襲った。

そろそろ我慢の限界で叫びだしたい大神である。

そんな大神の何かしらの雰囲気を感じたのかアイリスの雰囲気がガラリと変わり真剣な目付きに変わった。まるで戦が控えたもののようにである。

「アイリス？」

そんなアイリスの様子にさくらは心配になったのか、近づき、アイリスの背に優しく手を這わると視線を同じにしてといかけた。

「ねえ、さくら？」

「どっしたの？」

「このお兄ちゃんも霊力がある。……………」『光武』に乗って戦うのね。」

さくらは思っ。

アイリスは自分たちの任務の重さを小さいながらに精一杯意識しているのだ。

だからこそ戦いというものに対して反応する。

誰かが傷つくのがアイリスは嫌いなのだ。

本当に優しい子だといえる。

さくらは思わず戦いなどしなくてもいいと言いたくもなったが、アイリスはその言葉を望まないだろう、さくらは短い付き合いだがそれを理解していた。

ここに集う乙女は大なり小なり覚悟を持って集っているのだ。

だから適当なことを言わず、正直に真剣に答えることにした。

短い言葉でも確実に意識に残るだろうその言葉をさくらはアイリスに言ったのである。

「そつよ」

.....。

「アイリス戦争嫌いだよ」

アイリスはみんなが傷つくさまを思い浮べたのだろう、目に涙を浮かべてジャンポールをぎゅっと抱きしめた。

「心配しないで、アイリス。さあ、お部屋に行きましょう。マザーグースの本を読んであげる。」

さくらは少しでもアイリスの不安を除こうとアイリスが好きな本を読むことにした。

たしかに、アイリス含め自分や他の仲間は覚悟を持ってここに集っているが、楽しむ時間がないわけではない。

ある時間を精一杯楽しむ。そこから辛い時を乗り越える力が得られるのではないかとさくらは思う。

幸せが目の前であればそれを守ろう、大切にしたい、と思うのだから。

だからさくらは今はアイリスに楽しんで欲しかった。

戦いは大事だが、いつもそのことに意識を回していたら潰れてしまう。

それにアイリスはまだ9歳なのだ。これぐらいの楽しみはあつてしかるべきであろう。

そんな、さくらの柔らかな感情に当てられてアイリスは落ち着きを取り戻した。

安心し、涙を拭くと「うん」と頷いたのである。

『さあ、今は夢のなかへ、そのひとときが喜びであることを心より願おう。』

そう、本が語りかけてきてくれますようにとさくらは思い、アイリスを自室に連れていこうとしたが、大神一郎を忘れていることに気

がついた。

大神は自分が空気になっていていることに虚しくなった。ああ、さくらくん今思い出したのですか？

いま、「あ」って顔になりましたよね？大神はここでの人間関係についても悩まなければならぬようだ。

そんな大神の悩みを気づくことのないさくらは、一刻も早くアイリスを安心させたい気持ちが行先したのか、大神への対応そこそこに早々とアイリスを連れて離れていった。

そう、その間にこう捨て台詞を残して去っていったのである。

「米田中将は支配人室にいらっしやいますー。」

そしてさくらは居なくなった。

ああ、さくらくん置いて行かないでよ。

せめて米田中将のところまで案内してほしかった。と、つい思ってしまった大神は悪く無いだろう。

だがしょうがない。

こうなってしまうては、自分で探すしか無い。

人の気配があるところで米田中将の居場所を聞けばいい。

大神はそう思って足を人の気配がありそうなところに急がせた。

するとどうだろう。早くも人の気配があるところにたどりついた。

なにやら着物をきた女の人が食堂に入るようだ。

なにやらしきりに周りを気にしている。

一体どうしたのだろうか？

大神は疑問を持ち、いい機会だからと、米田中将の居場所を聞くついでに何か困っていれば助けてみようと思って、近づこうとしたその瞬間である。

その女性の大きな声が食堂内に響き渡ったのは。

4話 大神一郎偏 続き(後書き)

読んで下さり有難うございます。

よければ評価、感想よろしく御願します。

次の話は来週の頭か後半にアップしようと思えます。

5話 大神一郎偏 続き(前書き)

お待たせしました。

今回の登場キャラは神崎すみれとマリア・タチバナです。

米田中将は次回に持ち越しということで
オリ主登場はもうしばらくお待ち下さい。

5話 大神一郎偏 続き

「誰か手を貸してちょうだい！」

そんなよく通る声が食堂内に響き渡った。

大神は自分の考え道理彼女が困っているのを理解して女性のもとに駆け寄っていった。

そう、駆け寄っていったのは良かったのだが、大神は思わず鼻の奥から込み上げてくるものを抑えようと花を手で抑えた。

どうしてそんな体勢にならなければならなかったのか？

それは目の前の女性の大胆すぎる服装に問題があった。

彼女の肩は、はだけ、胸の谷間が盛大に丸見えになっている。

胸がこぼれ落ちるのではなからうか？

そんな女性を見てしまっでは、鼻血が出そうになるのも当然である。

大神は、長い軍人生活で、男ばかりいた生活環境にいたためとはいえ、女性への免疫が出来ていない自分の情け無さを呪った。

それにしてもつかみがいがありそうな胸である。着物からこぼれてしまわないだろうか？

大神は思わずそう思った。

実は大神ムツリスケベなところがあるのである。

それは、女性とのふれあいが極端になかった生活が影響しているとも言えなくもないが、まあ、その話はここではひとまずはおいておこう。

そんな大神のいかがわしい視線や考えを知るはずもない女性はなれた口調で命令しだした。

「そのあなた！」

「じ、自分でありますか？」

大神は自分よりも若い女性にたじたじになった。

なんでだろう。

大神は思った。

おもいつきり身分が高い人と話している気持ちになる。

大神は厄介ごとに巻き込まれたことを確信した。

「バカ面してないでこっちにいらっしやい」

は、はあ……。ほらね？ いったい何を命令されることやら……。

「そこに落としたりフォークを拾って新しいものと取り替えてくださ

らないかしら？」

？そんなことでいいのか。大神は思わず拍子抜けしてしまった。

さつきまでの威圧感は一切どこへいったんだと思えるぐらいである。

この一言によって大神にはこの女性が年齢道理に見えた。

だから、大神は笑顔でこう答えることができたのだ。

「いいですよ。」

と、それにナイフとフォークで食事する習慣の人が、しかもかなり格式高い人はマナーを大事にすることを大神は心得ていた。

軍人の士官学校でそういう事も上官から愚痴られ諭された時が懐かしい。

たしか、こういう大衆が集まり食事を共にするようなところで、しかも給仕をするものがいた場合は自分で落とした食器などを取る行為はマナー違反であったはず。

大神は即座に自分がやるべき最善を導きだして目の前の女性にフォークを渡した。

「……………はい、どうぞ」

すみれはフォークを大神から受け取ると満足そうにした。

「ありがとう。ところで、ここはトップスターこの神崎すみれを差

し置いて、いつの間にか、マリアさんが歌劇団のリーダーになっているけれど、あなた、この事とどう思う?」

「え?」

大神は突然の愚痴のオンパレードに対応できなくなった。

マリア?リーダー?一体なんのことだ?

そんな大神の疑問をよそに神崎すみれと名乗った女性の口は止まらない。

「まったく、あの米田のクソじじい!人を見る目がないんだから!」

はあ、この子は何をそんなにストレスを抱えこんでいるんだ?

今あった、ある意味一般人の部外者にこんなに愚痴をいう程ストレスをためているのだろうか?

というか、なんでそんなこと自分に言うのだろうか?

冷静になって考えてみるとこの場所は食堂で、本来ならボーイなる者達が活躍する場所。

しかも彼女は食事中、そこから考えみるに自分をボーイと勘違いしたのだろうか。

ここは自分のことをおしえたほうがいいだろうか?

大神はこれからなんとも顔を合わせるかもしれないと思い、いを決

して自己紹介することにした。

「……………自分は、本日を持って帝国華撃団に配属になりました帝国海軍少尉、大神一郎です。」

「……………!」

「米田中将にお取次ぎを願いたいのですが」

大神の自己紹介を聞いた神崎すみれは、驚きと共に己の間違いに気づき、頬を染めた。

だがここは、さすが女優ということなのだろうか？

すぐさま表情を取り繕って、大神に詫びた。

「あら、どうしましょう！これは、失礼いたしましたわ。ほほほほ……………」

はは、大神は初めてこういう人種を見た。

頬に手を当て、まるで絵に書いたかのように高笑いするのである。

まあ、色々とごまかしているつもりなのだろうが、少し滑稽に思えた。

「今のこと、米田さんにはないしょよ！いいわね!」

しかも、彼女は自分のことしか考えていないようだ。

自分への誠心誠意な詫びの優先度より米田中将の悪口を、告げ口される方が嫌なようだ。

大神はそのことに若干腹を立て、注意しようとした。

が、神崎すみれと名乗っていた彼女は大神に突然急接近した。

「え！」

大神が反応するよりも早くすみれは、大神の頬にしばむようにキスしたのである。

「これで勘弁なさいね」

「うああ、突然何をするんですか！」

大神はこのことにより先ほど抱えていた怒りがすべてどこかに散らされてしまったようで、あたふたして、年甲斐もなく顔を真っ赤なりんごのようにして抗議した。

「うふん、照れなくていいのよ。ちょっとした仕返し………じやなかった、おかえしよ」

これは、彼女が俺のことを間違えて慌ててしまったために俺が悪いってことなのか？

ああもう、いい。

とりあえず今は米田中将のところに急ぐ。

ここがどういふところで、自分はなんのために呼ばれたのか聞かなければ心の安定はない。

そう思った大神は、すみれにまくし立てるように米田中将の居場所を尋ねた。

すみれは、そんな大神の態度にどこ吹く風で、なんのこともないと言つような態度をとつて米田中将の居場所を大神に教えた。

「じゃあ、支配人室に行くのはいいけれど、くれぐれも今のことは、他言無用よ！お分かり？小川少尉」

すみれは相当米田中将に影口を吐いてしまったことを知られたくないようだ。

それにしても、いい度胸である。こんな高圧的な言葉で口止めしてくるとは思わなかった。

まだ、「思わず口についてしまったの。反省しているので言わないでくださる？」なんて殊勝な態度であれば、自分も水に流してもやぶさかではないのに。しかも、自分の自己紹介もまともに聞いてないみたいだし。

大神は先程の怒りがぶり返してきて、威圧するようにすみれに答えた。

「自分は大神です！」

「いいからお行きなさい！」

「は、はあ」

もう手がつけれないとはこの事だろう。

ああ、本当にこの子はいいとこのお嬢さんなのだろう。

大神は色々と諦めてここからさることにした。

こんなところで門灯しているよりよっぽどそのほうが有益だと思っ
たからだった。

そして付いた支配人室。

………ここが、帝国華撃団の長官、米田中将閣下の部屋か……

米田一基中将………。白露戦争で活躍した大戦略家一体どんな人なのだろう。

大神は支配人室にいるであろう米田中将にあうため支配人室の扉を
ノックしようとした。

その瞬間である。

金髪の髪を短く切りそろえ、髪で片目を隠している外国人だろう女性
性がでてきた。

「あら、どなたですか？こちらに御用でも？」

「え、あ、はい私は帝国海軍少尉、大神一郎です。米田中将にお会

いしたく思います。」

そう大神は、目の前の異国情緒漂う美女に少々照れながらも答えた。
するとどうだろう。

彼女は大神一郎をつま先から頭の先まで、大神より高い背をいかになく発揮し、値踏みするように見た。

「あなたが帝劇に配属されてきた大神少尉ですか。……初めまして、マリア・タチバナです。」

名乗ってきたマリヤという女性は何かを考え込むように大神に自己紹介した。

それは、大神に対しての何かしらの感情だということは鈍感大神にしては気づくことができたが、そこから先は思い当たらなかった。

だが、ここは自己紹介してきたのだから、迎えてははくれるのだろう。

大神は一人自己完結し、目の前の美女マリア・タチバナが、米田中将を紹介してくれるのをまつた。

支配人室から出てきたのだからきっと紹介してくれるだろう。

そう思っていた大神は甘かった。

マリア・タチバナは、大神がある意味で邪魔なように理解しているのか自己紹介を終えると早々にして、大神の前から居なくなっ

まったのである。

「私は稽古があるのでこれで、中將は部屋にいます」

そう告げるだけ告げて大神の前からあしばやに去って行ってしまったのである。

大神は思った。

あまり歓迎されていないようだ。

それに伴いあの女性は見るからに美人で巨乳だが、性格はちょっとどうか、かなり厳しい者のようだ と理解した。

ここはしょうがない気をとりなおして米田中条閣下にお目道理を願おう。

大神は自身の服装の身なりを整えるよにしてパンパンと洋服を払うと、軍服の襟を正して支配人室の扉を「はー、ふー」と深呼吸後にノックした。

「おう、はいんな」

すると気の良さそうな男の声が扉の奥から聞こえてきた。

大神はその入室許可と共に勢い良く扉をあけると、軍人よろしく、着任宣言と自己紹介を敬礼とともに行った。

「本日12:00を持ちまして、帝国華撃団に配属になりました帝国海軍少尉、大神一郎ただいま、出頭しました。」

大神はここで、勢いと共に自己紹介をしたのを少々後悔することになった。

いや、自己紹介が後悔ではなく目の前の男に後悔したというのが本当のところなのだが、だって目の前の中将と思われるものは、昏間から酒をかつくらう、酔っぱらいのじーさんであったのである。

「うーひっく」

おやじのしゃっくりが部屋にこだまする。

臭い、この部屋が異常にくさい。

よく俺はここで自己紹介できたものだなと、吐き気を抑えて、大神は目の前の男に視線をおくった。

決して今の自分の感情が相手に悟られないようにと思いつながら。

「おう、大神」

「はい、どうされました？」

さすが中将ということ自分で自分が中将に一目会うなり幻滅しているということがバレてしまったのだろうか？

左遷か？

俺は左遷なのか！

というか今が左遷なのか？

こんな酔っ払いのところでどうやって帝都を守るんだ？

大神は背にいろんな意味で冷や汗をかきながら恐る恐る目の前の酔っ払い、失礼。米田中将に対応した。

5話 大神一郎偏 続き（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。

よければ感想、評価お願い致します。

停電などの影響で今回のアップは不明です。

ですが可能なかぎり早く仕上げたいと思います。

6話 大神一郎偏 続き(前書き)

お待たせしました。

なんとか書き終えたのでアップします。

あともう少しで主人公が出てきます。

次の話数が、その次くらいだと思います。

6話 大神一郎偏 続き

「ひつく、花小路伯爵からきてるぜー、それにしても、大神かてえ、かてえよ。挨拶が！」

何を言われると思ったが、そんなことかと大神は思った。

どうやら、目の前のおやじに幻滅していることはバレていないらしい。

これが原因での左遷のせんは消え去った。あーよかったと大神は心のなかでほっとした。

そんな大神に向かって米田はここでの任務についての心得を語りだした。

「そんなしゃちこばってちゃこの任務はうまくいかねえぜ」

というこしらしい。

それにしても、ここでの任務とはなんなのだろうか？

機密任務、帝都を守る任務とだけ聞いたが、その概要を此処に来るまでに教えてもらうことはできなかった。

機密事項だとか何とかで、特務だとか言ってその場での質問を上司に遮られてしまった。

ここは、目の前の酔っぱらいに聞くしかないだろう。

いくら、上司がこんなでも、昔は日露戦争の英雄だったんだ。

大神はそう思い、思い切って自分の不安事項である自分に課せられた機密任務について答えを得ようと米田中将に問いかけた。

「任務、自分の任務とは一体なんなのでありますか！」

「知りてえか？」

「はい！」

「じゃあこの服に着替えろ、もうすぐ舞台を見に客が詰めかける。

オメエの任務は受付でお客様の切符を切ることだ。つまり、モギリってやつだな」

はあ！モギリ？大神は驚愕した？一体なんのことだ？

そんな驚く大神に追い打ちをかけるように米田中将はこの劇場での役割を告げた。

色々と雑用とこき使ってやるから覚悟しろよってことらしい。

大神はこの事柄から、必死にこれは秘密任務、これは秘密任務と言いつ聞かせながら、あの時のさくら君が言った帝劇が帝国華撃団という（武装組織的なもの）であると、さくら君言っていないが、多分そう）秘密組織であること信じて米田中将から託された仕事を解釈しようとした。

すると出たのだ、納得出来る答えが。

だから、それをそれとなく米田中将にあってますよね？的に話しかけた。

「えー米田中将のおっちゃん仕事を全うしたいとは思っているのですが、それは諜報活動としてどのような役割をこなせばよろしいのです？」
「こは、帝劇を使った秘密組織だと理解しているのですが？」

「へえ、誰から聞いた。その話を？」

「え？『帝国華撃団に配属する。』という辞令をもらったときにこれは特務で秘密であるとのことから、秘密組織であると理解しました。そして、迎えに来てくれたサクラ君が劇場に案内するってことでおどきましたが、そこであっているとのことでしたので、その劇場が帝国華撃団と理解しましたがあっていますよね？」

「まあ、あつてはいるが、色々と勘違いしているな。ここはたんなる芝居を見せる劇場でしかねえ。オメエさんの頭上にある額にはなんて書いてあるか見てみな。」

そう言うと米田は、支配人室中央に飾られた大きな額を指差し、いった。

大神はそれを見ると驚愕して、顎がはずれんばかりに大きな口を開けた。

「て、帝国華撃団ではなく、帝国歌劇団ですか……。ははは、字が違いますね。ですが自分は秘密部隊に配属になったはずですよ。辞令にだって、」

「まあ、そうだな。」

「だったら、」

「まあ、聞け。たしかに歌劇団は”秘密舞台”だよ。フツ、フハハ、国家組織がこうやって舞台で収入を得ているとはお前も知らなかっただろう？」

「そ、そんな、ばかな!!」

軍部が、劇場を運営して軍備を整える資金にでもしているというのか？だから、民間にそれは知られてはいけなから秘密部隊ならぬ秘密舞台だと！

大神は自棄になりそうになった。

顔は熱く火照っている。

頭に血流が回りすぎて頭がいたい。

うまく思考ができない。

ああ、俺は、俺は一体なんのためにここへ配属されたんだ。

その謎に米田中将は笑いながら答えた。

「オメエさんは色々と騙されたってことだよ。第一おれはもう中将なんかじゃねえ

とつくに除隊して今はある方の世話でここの支配人をさせてもらっている、ただの呑んだくれよ。

分かりやすく言えば天下りだな。それを考えると、これも秘密にしなければなんねえ箇所といえれば箇所だな。でもまあ、それはそれとしてだ、ここは、男手が足らなくなつてよ。軍で後輩だったやつに雑用として使えそうなのを見繕ってくれとたのんだが、そしたらやつこさん、お前さんをよこしたつてわけさ。士官学校でずいぶん良い成績で卒業したみたいだが、そこでなにかやらかしてもしたか？相当恨まれてるな」

「そ、そんな」

「へへ、だからこの人事は軍の特務でものなんでもねえ。早いはずしオメエさんは左遷されたんだよ。大神一郎少尉」

「しよ、承服できません。自分はこの国の平和を守るために、そのために海軍に入りました。

それがなぜ、劇場の切符切りなどしなければいけないのですか！お願いです自分を軍に戻してください！」

「大神よ……軍人は軍規に従うもんじゃねえのか？」

そんな事言われたら何も言えないじゃないか！

軍人はいかなる場合でも任務に忠実であるべきだからだ。

逆らつてはいけないのだ。

「俺が言うまでもなく、理解しているじゃねえか」

米田は大神が答えに行き着いてみるとみて言った。

軍人というものはそれほどまでに任務にさからうことはできないのだ。

米田中将もとい、支配人は大神に同情するしかなかった。

「まあ、これは、もう決まっちまったんだ。不服だとは思うが従ってもらうぜ」

この命令に逃げ道は存在しない。大神は、絶望しながらも、着任宣言を改めて米田に向かって行なった。

それが、取り返しの付かないものだとして理解して。

「これより帝国海軍少尉、大神一郎。これより帝国劇場のモギリを努めます。」

そうして大神は米田支配人から細々としたことを言い渡されて、そのとき配給されたモギリの制服を片手に支配人室をでた。

自分の部屋で着替えてこなくては、大神はヤル気が抜け落ちたようで、まるで亡霊のように歩き。米田支配人に言い渡された二階の自室に向かった。

「あ、大神さん……」

自室に向かう途中大神とすれ違ったのはこの帝劇に大神を案内した真宮寺さくらであったが、いろんな意味で抜け落ちてしまい呆然自失になっている大神はさくらの存在を認識できなかった。

さくらは大神がおかしくなってしまったことに戸惑いを覚えた。

まるで生氣のない死体である。

一体どうしたというのだろうか？

さくらは大神に再び声をかけようとしたが、大神は自室に肩を丸くし、嘆息した姿勢を崩さないまま部屋へ入っていった。

さくらは大神の部屋をたずねノックするべきか、大神が入っていったドアの前で迷っていた。

「どうしよう」

そうこうしているうちに、大神の部屋のドアがなんの気配がないままに開いた。

出てきたのは、切符切りのモギリの制服をきた大神であった。

大神はあいもかわらず、目の前にいるさくらを認識できないようで、とほとほと階段を降り、一階にあるモギリの仕事を行う受付へと向かっていった。

さくらとしてはそんな大神を疑問符であるクエスチョンマークを浮かべて、大神の背を見送るしかできなかつた。

そうして本日の夜の部の演目が始まる時間が近づいた。演目は『椿姫の夕』である。

6話 大神一郎偏 続き（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。
よければ感想、評価よろしくお願いします。

それにしてもゲームをやっていると思うのですが、初めの頃の花組はギクシャクしてますねー。
アニメ版でもそうですが、やはり人と人を結ぶ役割は大切だとつくづく思います。

ゲームや、アニメでは大神一郎がその役割をになっていますが、私が書く二次小説はオリ主がキーマンになればと思っています。
では、次回を楽しみにしてくださいれば嬉しく思います。

7話 大神一郎偏 続き (前書き)

お待たせしました。

書き終わりましたのでアップします。

次回からは、オリ主編です。

お楽しみに。

7話 大神一郎偏 続き

時たつうちに人が一人二人と増え、モギリの仕事が忙しくなり始めるころ、人々は帝劇に普段じゃ考えられないほどの列を作っていた。

そう、全ては新米モギリ大神一郎せいである。

普段ならなんの問題もなく入れる人数だと大神が知らなくても、お客のほう知っているためもあって、大神に早く早くとせくばかり、そのためか慣れていない大神はさらに焦りモギリの仕事ができなくなっていた。

しかも、ゾンビのような、死体のようなやる気の無さをそのままにして仕事をやっているため、仕事があまくいかない。

しかもこの大神、客からのブーイングのせいか憎しみを客一人ひとりの切符に込めるように切るっている。

そんな状態の大神ではとてもじゃないがこの状態を打開できるはずもなかった。

ついに、お客も我慢の限界なのか、クレームの嵐が大神襲いかかった。

「おい、何やってるんだ!!」

「切符を切るぐらいさっさとできないのかよ」

大神はこの客たちに頭を下げながら、初めてなんだからしょうがな

いだろ！と心のなかで呪詛のようにつぶやきつづける事で平静を保った。

が、そんな必死に堪える大神に、またも追い打ちをかけるようにとある二人組が長い列から外れてが現れた。

それは二人で、列の先頭から三分の一ほどいったところにいる人物達であった。

「おい、いいかげんにしろよ」

「そうだけ、ボスが、すみれ嬢の椿姫見れなかったらどうしてくれるんだよ。」

大神は、その反応にむかつ腹が立ったが、自分のせいで遅れているのは事実だったので、謝罪して、それとなく列に戻るように促した。

が、その二人、何か大神の態度が気に入らなかったのか、さらに機嫌を悪くして大神に詰め寄り、大神の肩を突き飛ばした。

「このうすのろが！」

その二人の怒声が、辺りに響き渡ったとき、大神の堪忍袋の緒が、切れた。

「貴様らなにをするかあ！」

大神は二人に取っ組み合いの喧嘩を仕掛けようとした。

その行動はいままでストレスを吐き出すかのような行動で危機迫

るものがあつた。

それにともない体の周りに青白いオーラのようなものが見えた。

その雰囲気にはさすがの二人組もビビったのか、口をつぐみ、一步後ろに下がった。

が、自分たちが少しでもビビってしまったことでプライドを傷つけられてしまったことに気づくと、怒りという感情に火がついたのか、大神に拳を握り締め向かっていった。

その次の瞬間、この場にドコン！という破砕音がこの場に響き渡った。まるで、ドラのようである。

「……いつつ……」

そう、この問題を起こそうとした大神初め二人組の脳天に大きな拳が突き落とされたのだ。

その瞬間、大神そしてこの二人組計三人は、服が汚れるのも気にできないうつで、地面に倒れ、体を丸く抱え込み、頭に手をやってのたうちまわった。

まさに成敗されたのである。

この二人によって、

「支配人すまねえ。うちの子分が迷惑をかけた」

「なーに、こちらも同じですよ。」

いわずもがな、米田支配人と、そして二人組のボスであった。

「米田中将、わたしは、」

「バカタレ！わたしは、米田支配人だ！」

大神は、突然のことに言い訳を考え米田中将に訴えようとしたが、米田支配人にそれを止められた。

そのことで大神は、軍のことはご法度だと秘密舞台だということをおもいだした。

資金源を得るといふ自分にとってはどうでもいい劇場ではあったが、軍の秘密は秘密、大神は自分の迂闊さを呪った。

こんなチンピラー二人に言い寄られたからって、怒りにわれを忘れてしまうなんて……自分の未熟さを実感した大神であった。

一方、二人組はというと、傍らで、ボスによって地べたに正座させられて怒られていた。

大きなたんこぶを盛大につくって。

まあ、大神もなのだが、そんなこんなでこの場は収められ、米田以下帝劇スタッフで切符切りが行われ事なきを得る事になったのであった。

そうして大神は米田支配人に罰として劇場の内と外の掃除と、ゴミ出しなど、雑用を一人でこなすことが言い渡された。

大神は肩を落とし、自分は何のために軍人になったんだ？と、自問しながら、奥歯をぎりぎり噛み締めてなんとか仕事を終わらせた。

時間は深夜、二時である。

大神は最後のゴミを出すため外に出た。

すると外は大雨であった。

大神は、自然と涙腺から涙が止めどなく流れていることに気づいた。

この冷たい雨の中、頬をつたう水は暖かかったからだ、ああ、俺はどうしてここにいるんだろう。

大神はこの年になって泣くとは思わなかったと思いながら……
・盛大に泣き叫んだ。

闇とい中で声をからし、雨という涙を流して。

「俺は、劇場のモギリじゃない！、おれは、俺は！海軍少尉、大神一郎だああああああ！」

そうして、ときは流れ、夜は終わり、朝になった。

一方・・・

オリ主こと、治療直純は、朝早くに目を覚まし旅館の温泉につかり、朝風呂と洒落こんでいた。

7話 大神一郎偏 続き (後書き)

最後まで読んで下さりありがとうございます。
よければ評価、感想お願いします。

「やっとオリ主がかけるー」とおもつ今日この頃です。
では次回でお会いしましょう。それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3973r/>

サクラ大戦 オリ主 活動日記

2011年3月26日03時13分発行